
闘え！ いつ子さん

じょーもん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闘え！ いつ子さん

【Nコード】

N7813L

【作者名】

じょーもん

【あらすじ】

香貫いつ子。四十代 一桁目の数字はヒミツ。

マンション暮らしの核家族。

楽しみは主婦ランチと、子どもをダシにした世間話と、茶シバキ。

敵は、体重計と家計。楽に流れる己の気質。

そんな、どこにでもいる、フツーのおばさんである彼女だって、一応、闘う職業人としての顔も持っているのであった…。

筆者の本業でもありますが、私は決していつ子さんではありませんせぬ。くれぐれも、私小説などと、誤解なきように…。

「職業小説企画」参加作品です。

1. 猫撫で声には要注意

コーヒ―は贅沢だとは思っけれど、わざわざ取り寄せている。焙煎した日に出荷されてくるのがウリで、届いたその日は家中にいい香りが立ち込めるぐらいだ。宅配便の兄ちゃんでさえ「いい匂いですよね、荷台が本当に香るんですよ」と世間話を仕掛けてくるぐらいの一品だ。

もつとも、モノがモノゆえに、金額が張るといつてもたかが知れている。酒もタバコもやらない彼女の唯一の嗜好品は、幸いそんな贅沢をしたところで家計に響くようなものでない。飲める量も飲みたい量も、アルコールなんかと比べたら、可愛いものだ。

子供が食い散らかした駄菓子^{かぬき}の残骸をお茶請けにしつつ、香貫^{かぬき}いっ子は通販の雑誌をぱらりとめくった。

ネットの通販サイトは油断ならない。ちょっと気が緩むと、ついカード決済でいいやとクリックをしてしまう。引き落とし時に後悔するのは二か月前の衝動買いでちよつと懲りている。仕事部屋にしている六畳間にでんと居すわっているのは、取っ手付きの支えみたいになつて棒に捕まりながら、脚を左右にキコキコ、一日一分三回を毎日すれば劇痩せ可能という美容器具だ。これで若さを取り戻すのよと意気込んでいたものの、到着した日に一度乗ってみて、そのしんどさに悲鳴を上げた。

使用しても七日以内なら当然返品可能なんだけど、電話かけたり梱包し直したりするのは面倒だし、夏近くになって服の露出度が高まれば、幾ら自分でもやるだろうと、返品手続を取らなかった。だから、真新しいそいつは、いつ子の横で「いつでもお乗り」とばかりに、つんとすましている。

やっぱり返品してやりやよかった。

半月も経ってからそう思ったけれど、いまさら電話したところで返品は丁重にお断りされるだろう。掃除用具入れの奥には、ダンベルセットと、ひっぱるだけでみるみる筋肉がついて基礎代謝が上がるとかいうゴムチューブが押し込まれている。困ったもんだ。

子供の塾に、お稽古代に、食費にと、銀行に振り込まれた夫の給与は、只事でない勢いで飛び去っていく。けれどバブル時代にOLをして、浮わっ付いてしまった金銭感覚は出費に対する引き締めの対応が容易に取れない。連れ合いの年収は悪くはないけれど、必要な支出の差額を見たときには愕然とする。長男は春から高校生。次男坊も入れ違いで中学生になる。食費も教育費も、当分の間、おそらく減ることはないだろう。貯蓄に少しでもまわさなければと思う。キコキコ劇痩せグッズに騙されている場合では本来ないのだ。けれど、こういう無駄遣いは、一向に消滅する気配がない。

今の若い子たちは、就職超氷河期とかで苦戦しているけど、本当に気の毒だと、いつ子は思う。いつ子がOLしていた頃は、にこにこ笑ってお茶を入れて電話を営業に取り次ぐだけで、さほど捨てたもんじゃない額の手取りがあった。自宅から通勤で母親の手弁当付きだったいつ子は、年に二、三回、仲がよい女友達と海外旅行に繰り出して、一着五、六万はするスーツをシーズン毎に新調できるぐらいの余裕があった。ユニクロで千円の安もののシャツが、週末セールで半額近くに安くなるのを待ち構えている、おばさんになった自分なんか、そのころは思い描きもしなかった。

現在のいつ子の悩みといえば、少年リーグでさえ活躍できない次男坊が、野球に命をかけるより勉学にエネルギーのひとも向けるようになってほしいということと、頑張って背伸びしてワンランク上の高校に滑り込んだ長男が、塾のフォローなしに学校の授業について行けるのか、ということだったりする。

あとは主婦の当然の悩み、今晚、何を食卓に乗せるか、とか。

あいつを衝動買いしたときのことを思い出す。在宅でジミな仕事をしているせいで、眠気覚ましにお茶とお菓子は欠かせない。久しぶりに体重計に乗って、あんまりな数字に悲鳴を上げた後、それをあわや壁に向って叩きつけるヒステリーの発作に襲われそうになった。それをぐつと我慢して、気晴らしにパソコンを立ち上げた。

迷惑メールと紙一重のゴミメールの山を一括選択してごみ箱アイコンをクリックしてから、いつ子は途方に暮れた。

ちよつと前までいつ子は、多人数参加型のMMOというジャンルのネットゲームにはまっていた。タウン戦を制覇できるような大ギルドで中堅どこという立ち位置。最初はとても楽しかった。けれども、いつのまにか勃発した派閥内戦争で、ギルチャ（ギルドメンバーだけで行うチャットのこと）の雰囲気は最悪になっていた。昼間は基本的に主婦が多いから、夜のゴールデンタイムほど荒れていないけれど、オンラになってる人が、派閥内戦争をムキにやってる人間だったりすれば、自然挨拶だけしてそくさと狩り（レベルあげのモンスター退治のこと）に出て、もくもくとソロ（パーティーを組まずにプレイすること）をするしかない。四十も黄昏どきを迎えて、何でゲームの中でまで人の顔を窺わなきゃならないかと思うと腹が立つ。それと同時に、ただモンスターをクリックしているだけという行為の虚しさに突然気付いた。一発でMOBが蒸発するのは気持ちいいけれど、課金アイテムを買ってまでするようなことだったか？

熱が冷めれば、引退（MMOから足を洗うこと）していった人の気持ちが分かる。ゲームを始めたところに、すごい装備を持って、ゲームの中の世界を知り尽くしている人たちが、あっさり辞めていく理由がさっぱり分からなかったけれど、こういうことだったのだ。腹周りがどうしようもなくだぶついた紛れもない中年。リアルのい

つ子は誰から見ても間違いなく『おばさん』というジャンルの生き物だ。それがピチピチのナイスバディーのヒラ（PTにおいて回復役を請け負う）として日々戦いに向い、瀕死の仲間を救い、感謝され、何人ものイケメンで派手なヨロイを着た男キャラから、若い娘だったら逆にさめそうなほどに歯の浮くヨイシヨをされまくるのだから、「この快感、たまらないよね〜」なんて思っていたけど、たとえ月額五百円の課金でも三か月分なら贅沢ランチができたではないか。ああ、本当にアホらしい。

一度そう思ってしまったえば、いつもは習慣的にクリックする、あの世界へのアイコンをポイントする気になれなかった。ブラウザを立ち上げたときに、ついうつかり派手にぴかぴかしていた「ホンキでダイエツトしたい貴女だけに」うんちゃらんちゃらという宣伝が目に入ったのだ。ゲームなんて虚の世界にはまってる場合か、美容と健康がキーワードよねっとばかりに、クリック先のサイトで購入ボタンを押してカード番号を打ち込んでしまった。後悔は常に先に立たず。

いつ子が衝動買いまでには、ちよつとだけ距離がある通販雑誌をパラパラとめくっていた理由にはそんな経緯がある。ソファにでんと居すわる前に、別冊の『美と健康特集号』だけは、死んでも手を出さないぞ、とばかりに新聞ごみ入れに突っ込むのを忘れなかった。だいたい、これだけ派手に宣伝かましといて『あなただけに特別なお知らせ』っていうのが、そもそもいかがわしいのよねえ……。

そのとき、愛用のピンクのデコ電が、大好きな嵐の着メロを奏でた。いい年のおばさんには寒すぎると息子たちに評判が悪い電話だけど、「えーっ、ママがピンクのフリフリドレスを着た方がいいの？」と冗談をかましたら、彼らにとってそれ以降、私の愛機はアンタッチャブル・アイテムと化したようだ。

「もしもし、香貫でございます」

電話にでると、声のトーンが半オクターブは軽く跳ね上がる。〇しをしていたときの後遺症だ。ケイタイの画面に表示された発信人名がカイシャのタントーさんだったから、元必殺語尾上がりのカマトト（これも死語か？）ぶりにも気合が入る。

いつ子を取り立てて冴えたところの無い香貫と結婚したのは、バブルが弾けてリストラの嵐の真っ最中だった。あの頃は、企業もバブルの熱からさめきつていなかったから、不況へ一直線という世相だった割に、辞めていただくためには、自主退職なら退職金は倍額支給などという豪気な会社が殆どだった。

それはちょうど今は亡い父親がガンと発覚したころのこと。いつ子には兄が二人がいる。つまり、いつ子にはたった一人の娘として溺愛されてきた記憶があるのだ。臺^{よう}が立っても娘は娘、生きてる間に花嫁姿のひとつも見せてあげないと、あの人は成仏できないだろうな真剣に思っただのだ。すわ、結婚相手捜しと、鵜の目鷹の目で身近なところを隈^{くま}なく見回してみれば、目に付いたのが経理部に居た典型的モテナイ君の香貫だった。

若いときから彼は、人がよくて、明るくて、真面目一本だけど、遊び上手じゃなくて、バブル世相からは完全に浮いていた。合コンなんか出ても、人数合せという立場で、一人虚しく早帰りするような青年だった。

とにかく、さっさと結婚に持ち込めそうなこと。それから、他のスバライ女と比較される恐れがほぼ無いこと。ついでに経理は手に職系だから、万ーリストラ対象になっても、潰しが利く。程よく遊んだいつ子には、遊び上手な男と世帯を持つことは論外だった。

いつ子なんかでも、堅実で実直そうな青年を選んだと、父親は涙ぐみ、母親は賢いと褒め、兄たちは「まあ、尻に敷かれるの承知

でおまえなんかと結婚するなんざ、ボランティアと変わらんな」と酷い言いようだったが、いつ子はとりあえず、六月の爽やかな梅雨空の中、ホテルに付属したチャペルで結婚式を挙げた。費用はすべて両親が出してくれた。

別にジューンブライドのために六月挙式にしたわけじゃない。六月に退職すれば買い上げ対象にならない有休休暇を全部消化して退職日にすれば、賞与付きで退職できたからだ。もらえるものはもらって当然、という我が儘が利いた、いい時代だった。

年齢的に引退も秒読み段階にきてはいたが、当時の営業二課のアイドルという立場。バレンタインの義理チョコに二個で六百円程度のゴディバをばらまけば、ホワイトデーには、持ちきれないほどのワインやぬいぐるみ、花束なんかに化けた。だからこそ、女耐性に乏しかった香貫青年は、派手な営業マンたちでも落せなかった「いつ子さん」に、実質として「落された」ことになる。いつ子で男になった香貫は、ババア化の激しいいつ子に、今でも優しい。内心では不満を抱えているのかもしれないけれど、表面は穏やかなままに年を重ね、家事にも子育てにも普通に手をだしてくれる香貫は、自分の選択はまずまずだったという確信をいつ子に与えてくれる。

「香貫さん、お仕事の話なんですけど、今、お時間大丈夫ですか？」電話の主は担当窓口の木脇君だった。彼の声は、いつ聞いても爽やかでいい声よね、と、いつ子は一人うつとりする。

恐らく、会社の方は、こういう主婦心理を操るために、正社員の中でも見栄えとおばさん受けの良さを基準に、厳しい選考を重ねて白羽の矢を立てるにちがいないと踏んでいる。本当に、どの男の子もおばさんゴコロをくすぐるのだ。よく電話をくれる方のもう一人の谷口君は、大柄なんだけど、情けない声が力を貸してあげたい気分をそるような、困ったクマさんモード全開の子で、あの子に「

そこを何とかお願いします」とやられると、つい、よっしおばさんにまかせとき、という気分になってしまう。あれはイイオトコ系の木脇君のような直球勝負ストレートと真ん中でない分、おばさん殺しの芸が上よねえ、などと下らないことを品評してしまうのも、主婦の条件反射みたいなものかもしれない。

こちらの木脇君は、小柄だけどぴりりっという印象の、ついにてイケメンの好青年で、速記会社何かに置いておくより、ジャーニーズで踊らせたいというタイプだ。彼がにこつと微笑んで、「香貫さんはちゃんと仕事してくれるから、本当に頼りにしてるんです」と殺し文句を言えば、「まったく、木脇君てば、おだて上手なんだから」と、答えつつ、今週は主婦ランチの予定二件とPTAのベルマークちよきちよき作業日が入ってるから、頑張って二時間ぐらいしかしたくないと思っていたはずが、三時間分もうつかり引き受けてたりするのだ。恐ろしや。

「……言にくいんですけど、音、悪いんですよ。今回の。大変だと思っんですけど二時間、今週の金曜日までにお願いできますか？」
「えーっ、音悪いんですか？」

いやだな、という子は思う。音が悪いと、体力的にしんどいし、効率もがくと悪くなる。けれど二時間というのがミソだ。普通であれば一週間も余裕納期をもらえれば、苦戦するような分量ではない。三時間なら速攻パスだけど、二時間ならまあ何とかなるかもしれない。そんなふうに算段しているいつ子の耳に、木脇青年の爽やかヴォイスがねっとり絡みついた。

「聞き取れるところだけでいいですから。代入ばかりでも、先方さんもそんなに文句言えないですよ。それに、一般ですから、聞こえた通りで構わないですし。ちよつと三月だから議会がいつぱいいっぱいで、本当に一般大変なんですよ。香貫さん、お忙しいでしょうけど、何とかお願いできませんかあ」

代人というのは、聞き取れなかった言葉を音の数だけ「・」や「
」、適当な空白の挿入などでごまかすことだ。ジャーニズ木脇の
必殺、語尾の「あ」が理性を押し流した。

「はい、何とかやってみます」

「あつ、ありがとうございます」

さっきまでお強請^{ねだ}りモードだった声が、からつとさっぱり爽やか
モードに戻る。

「すぐにデータ作ってホムペにアップしますから、よろしくお
願います」

「木脇さん、次のときは、音いいのまわしてくださいよ」

心の中では「木脇君」なのだけれど、あつちは仕事をくれる会社
の正社員。当然、君などと呼び捨てることはせず、常識人の自覚が
あるいつ子は、電話では無難に「さん」づけで呼ぶ。

「はい、できるだけそうします」

このできるだけ、というところがミソだ。本当にコイツラは言質^{げんち}
をとられるようなヘマを打たないトークを心得ている。音が悪いと
先回りして言われるようなものは、いつも引き受けてから後悔する
のだけれど、まあ、木脇君には勝てないし、そういう子は思った。
どっちにしろ、仕事をしなければ、お金は稼げない。あの美容マシ
ン代の出費を穴埋めするためにも、一発気張るか、そう思ってい
つ子は自分に気合を入れた。

2・古参の盟友は公園にあり

いつ子の仕事は「音声反訳業」という。労働形態としては、いわゆる在宅入力者というジャンルになる。今や古びた感もあるS O H Oといえは格好いいと言えなくもないが、冷静に考えれば内職だ。内職としたら破格に稼げるが、外に働きに出ることと比べれば当然割に合うようなものではない。

もちろん、アグレッシブに打って出て、完全な自営業として独立することもその気になればできる。ことさらオフィスを構えなくても、インターネットでウェブページを持って宣伝して、仕事を獲得している人たちもいるらしい。けれど、定収入にはならないし、代金回収にまで気を使うのは主婦のバイトとしてどうかと思う。結局のところ、夫の扶養枠から出る気がさらさらないので、これで一本立ちしようなどと決して思わないのだ。

音声反訳とは、音声情報を 昔はカセットテープが殆どだったけれど、今はデジタル・データが主流 文字に「起こす」という仕事だ。

いつ子がこの仕事をしつたきっかけは、主婦の最強の情報入手手段である口コミクチによるものだ。

パソコンが一般的でなかった時代でも、それなりの企業でO Lをしていたいつ子は、キーボードで日本語を入力することは単純作業だとドライに考えている。主婦トモの中には、「パソコンを勉強して、有利なパートにつきたい」とか、「香貫さんはパソコン使えてすごいね」なんて言われたりするが、そもそも家電としてのパソコンのユーザをするだけなら、学んでどうこうするようなものなんかじゃないと。

ましてやプログラミングなんかチンプンカンプンで、動作が不安

定になったら思い切りよくリカバリなどという乱暴な主義の自分について、パソコンが「使える」などと表現できるほどいつ子は厚顔ではない。

ずっと専業主婦として子供中心に人生を取り扱っていたいつ子も、次男の孝之が小学校にあがったころ、そろそろ公園とスーパーと、幼稚園の送迎バスが走り去った後の歩道の上が社交界のすべてという、典型的ベッドタウンの専業主婦生活に別れを告げなくなった。

平均的な主婦というのは、言ってみれば家庭の暴君だ。彼女の自由にならないことは、金の量ぐらいで、誰からも命令を受けることはない。だから、仕事というものに返り咲いて、他人様に使われる立場になるのは気乗りしなかったけれど、自分の遊び資金に大手をふって家計費をまわせないし、子供だって年齢が上がれば諸かきりも増える。

まず、新聞の折り込み求人チラシに目が行くようになって、バブルの頃とは余りに違う相場に倒れそうになった。スーパーの隅に鎮座しているフリーペーパーも、よく見ればあやしい業界ばかりに映る。大体、一時間みっちり立ち仕事をして時給八百円以下というのは、幾らなんでも人をバカにしてないか？、どうしてもそう思ってしまうのだ。

そろそろ働きたいと思ってるの、というのを主婦仲間に宣伝しまくって、その実情は、あれがいやだ、こんなのはスタイルじゃないと盛大にえり好みをしているとき、「香貫さんって、パソコン使えるじゃない。だったら、私、仕事紹介してあげられるよ」と言ってくれたのが、長男が幼稚園のときに、ぐだぐだと晴れている限り際限なく続く、幼稚園バス見送り後の歩道おしゃべり仲間だったユウ君ママだった。

ユウ君ママが自宅で仕事をしているというのは、以前にも聞いた

ことがあった。なんだか入力系の仕事らしいし、保育園だの託児所に子育て外注しなくても、そこそこ稼げるという噂は聞いていた。ダイチ君ママみたいに、下のチビちゃんも自転車に積んで、某運輸会社のメール便の配達というのは、それは幼児がいてもできるという点だけは魅力だけど、晴れた日ばかりでないのだから、すごく大変そうだな。ミキちゃんママみたいに、スーパーでタイヤキを焼くのも、どうせお客さんに知り合いのママたちがぞろぞろいると思うと、ちょっと恥ずかしい。いつ子は、とりあえずユウ君ママのツテに頼ってみることにした。

「ケイちゃんママは、すごくしっかりしてるから、大丈夫だと思うけど、いい加減な人紹介したって言われるの困るのよね。ホントやってみて無理そうだったら、できないってちゃんとやってね」

ユウ君ママは、いつ子のことを長男の圭太を基準にしてそう呼ぶ。彼女がそんなふうにクギを刺しながら説明してくれたのが、仕事の内容は音声で文字にするものだということだった。今どき、記録などデジタル録音で事足りるような気がして、「なんで、そんな仕事は今どき生き残ってるの?」と、どうにも奇妙な気がしたものだ。

仕事をくれる会社は速記会社ということと、最初は何回か簡単な講習会を受ける必要があること。仕事をしながら（昔でいうところのOJTみたいなものだろうと思った）少しずつ覚えていけばいいということ。いつ子には、非常に美味しい仕事のように思えた。

ユウ君ママがその仕事を始めたのは、お姉ちゃんが幼稚園のときだそうだな。ユウ君はもちろん赤ちゃん。そんなときに、ユウ君のパパが会社でちょっとだけ出世させられてしまい、年収という形での雇用契約になったのだという。残業手当もしっかり皮算用して組んだローンで家を買ったばかりなのに、残業代が一切付かなくなってしまうって相当追い込まれた気分になったらしい。

それで、是が非でも働く必要に迫られたけれど、それでもふにや

ふにやの赤ちゃんだったユウ君を保育所に突っ込むのはどうして
いやで、いつ子と同じようにいろんな人に仕事を捜している宣言を
して育児と両立可能な仕事を捜したらしい。ハローワークに通った
りしたけれど、これはというのが見つからず、結局先輩ママに紹介
してもらって始めた仕事がこれだったそうだ。

ユウ君ママはインターネット経由で仕事をもらって、メールで納
品しているけれど、最初のころは会社が主催する無料の講習会に参
加すると、簡単でそれほど急ぎでない仕事を渡され、次の講習会の
ときに手渡しで納品して、次の仕事をもらって帰る。そのうち赤で
校正された原稿が帰ってくるから、それでデータを修正しながらま
ずかった点、どうやって文字にすべきか等々のノウハウを、自分で
蓄積していくことでスキルアップを図るらしい。

パソコンもプリンタも普通に持っているので、とりあえず初期投
資をしなくても済みそうというのは魅力だった。それにユウ君ママ
によると、ちゃんと仕事をして実績を挙げれば、パソコンを初めと
した器材一式の貸与が受けられるし、プリンタのインク代も負担し
てもらえるということだった。ますます美味しい仕事に思えた。

久しぶりにジーンズ以外のパンツを履いて、化粧なんかも気合を
入れて、履歴書を持って会社に行ったとき、あの木脇君を見て、「
なんて可愛いのに」と、いつ子の胸はときめいた。自分の息子もその
うちこんなふうに、爽やか系好青年然として会社員してくれたら言
うことなし。まさに理想の息子像。

ひきこもり、フリーター、ワーキング・プア、パラサイト・シン
グル。ワイドショーのまないた組板に乗る若者像は、果てし無く暗い。世の
中の先行きには絶望しか転がってないようにすら思えて、後十年後
のせがれ子どもが、わけもなく不安だったりするけれど、ほら、ちゃんと
イキのいいサラリーマンの青年っちゅうのは、絶滅してなかったの
ね、という安心感。

そして夕力をくくって始めた仕事だったが、これがあらゆる意味で非常に奥が深い世界だった。

3・戦場は孤独なものを見つけたり

会社のウェブサイトにある、在宅反訳者がデータをダウンロードするために設けられているページにアクセスする。「香貫様分」というタグがついたデータを選び、保存するをクリックすると、ダウンロードが始まった。音声データだけでなく、ある場合はPDFやワード、エクセルという形の資料の類も入っているので、圧縮してあるのだけれど、それでも相当分量がある。いつ子のマンションは光ファイバに対応しているので、大体二、三分でダウンロードがわかるけれど、ADSLなどだと十分以上かかるらしい。

これを作業するパソコンで解凍する。機械が機嫌をそこねると、システムのお兄ちゃんを呼びつけて助けてもらわなければにつきもさつちもいかなかったオフコン時代を知ってるいつ子には、この手軽さには隔世の感がある。

大体、昔のパソコンは、ハードディスクが一ギガもあれば、三十万を軽く超えた。それが今では何とかモバイルを二年使うとかいうヒモ付き契約で、ゼロ円というのだから時代は変わったものだ。

クリック数度でデータを使える状態にしたいつ子は、取り敢えず「悪い」という音声が多だけ「悪い」のか確認するために、フットを踏み込んだ。フットというのは、昔の電動ミシンについていたような形状のコントロールのことだ。当然これはイの一番で会社から貸与された備品のひとつだ。YAMAH Aと書いてあるので、キーボードとか、ドラムとかそういうもので使うフットコントロールを転用したものなのかもしれない。

音声再生ソフトに連動させて、これを踏み込むと音声が再生され、足を離すと設定した時間だけ少し前に戻って止まるということになっている。ただ再生させるだけなら、オーディオライクなソフトにある再生ボタンをクリックすればいいのだけれど、まあ、足で探り

当たったフットを踏み込んでしまうのは、仕事机に座ったときの半ば習慣みたいなものだ。

とたん……、聞こえてきたのはガサゴソ、ガサゴソという雑音だった。

ガサゴソガサゴソというこの種のノイズは、音声データそのものに入っている音だ。取り敢えず聞いてみて、いつ子は派手に肩をすくめた。ほんとにこれは、今までの数年の中でも飛び抜けて酷い部類に入る。

いつ子の基本属性にはバブル根性がある。必要であれば、そして可能であれば、道具にある程度の投資をするのは当然という、贅沢な価値観である。

講習会に会社に通うことがなくなって、自分でも仕事は何かと聞かれたら「音声反訳者です」と言ってもいいかなという気になってきたころ（実際にいつ子のそんなことを聞く人はいないのだが）、交通量が多い道路に面した北側の部屋を仕事場に充てていた彼女は、インターネットの直販で、BOSE社のノイズキャンセリング機能付きの、ほぼ五万近くもするヘッドフォンを購入した。ジャンボジェットの中でも静寂が楽しめるという宣伝はなるほど誇大広告ではなく、夏に窓を全開にしても、もはやトラックのエンジン音に舌打ちすることはなくなった。大体、このヘッドフォンの素晴らしいところは、充電池の形だ。耳パッドに当たる部分の上部に力ちっとはめ込むだけ。カバーを外したりそういう手間が一切要らない。いいものは、こういうところにデザイナーのセンスが光るんだよなと、したり顔のひとつも出ようというものだ。

とはいえ、BOSEサマがなかったことにしてくださる雑音は、

もちろん、普通に生活を取り巻いている種類のものだけで、音声データに録音されてしまっている雑音は、非常にクリアに再現してくださるのだ。

「勘弁して……」

いつ子が愚痴を壁相手に声に出す。孤独な仕事だ。しゃべる相手は、それが壁だったとしてもいないよりはマシというものだ。

今どきこんな音声を録るのはどいつだと、発注者の欄を見ると、そこには『あいだ法律相談事務所』とあった。探偵か、弁護士か、その辺りだろう。そういう業者をタウンページで探す人は、当然その業界のことを知らないから住所で当たりを付けて、当然上の方に出ているところから電話をしがちになる。「あ」「い」ときたら、もうほぼ間違いなくトップ表示されるということで、しかも平仮名表記だから、こののセンセイが相田さんや、合田さんや、藍田さんである可能性は低い。

このガサゴソという音は、前にも聞いたことがあるけれど、レコーダーをポケットに入れるか、鞆に入れて机の下に置かして、隠し録りしたものに違いない。

「いつ子さん、これはえらいこっちゃですよ……」

肝心の話し声は、非常に小さく遠い。それをはつきり聞こえようとボリュームを上げると、その雑音のガサゴソは我慢不可能な凶悪レベルに達する。こういうものは体力的に非常にしんどい。

一応どんな種類の話なのか聞こえと、ボリュームを上げると、なんとも擬音語にしたいくない種類の異音が耳を襲った。

「……おじさん、花粉症？ 風邪？ ちょっと反則だよそれ」

この先作業中の十数時間、予告なしで他人サマが鼻水をおかみに

なる暴力的な音が、突然襲ってくるとしたら、これは、しんどいなんてもんじゃない。

最初に聞こえた男の声よりさらに遠くで小さく霞んだ声がする。女の人だと雰囲気で分かるけれど、何を言ってるのかさっぱり分からない。

ガチャッガチャッと耳にガツガツくる音は、テーブルに乗ったコーヒーか紅茶のカップとソーサーがたてる音だ。こいつは、机で反響して状態を機械で拾うと、非常に甲高い、耳に心地いいとは決して表現できない種類の音になる。難聴者が使う補聴器も、こういう種類の音は大敵だと聞いたことがある。

人間の耳というものは本来非常に都合よくできていて、話し言葉は大きく増幅して、雑音は自動的に消音して聞こえるようにするものなのだ。しかし、機械というやつは、すべての音を博愛主義的に分け隔てすることなく、えり好みすることなく拾う。

しかし、いつ子は声を聞くためにボリウムを可能なだけ挙げて、殆ど暴力レベルの雑音の彼方にふわふわと漂う声に集中する。

もう一つ人間の耳の特徴として、どういう内容が話されているのか知っている場合と、まったく知らない場合では、聴き取り能力が格段に違うということがある。だから、このとんでもない品質の音であっても、どういう話し合いなのか知ってさえいれば、結構聞けたりするものなのだ。ただし、資料なしで聞き始めの場合は、あの遠い声が意味の通る文章として聞こえてくるまで、大きな山がある。

ガツチャーン。

物凄い音がして、いつ子は反射的にヘッドフォンをもぎ取った。心臓がドキドキしている。お茶こぼすな、お茶。フットコントロー

ラーを小刻みに三、四回踏むと0・8秒ほど時間が戻る。今度は大丈夫。ガッチャーンという音に襲われるという覚悟はできている。いくぞお。フットを踏み込む。

ガッチャーン。

お客様、大丈夫ですか？

聞こえた音を聞こえた通りに文字にするのが商売とはいえ、ウエイトレスさんの声は起こす必要は当然ない。『お客様』ということは、喫茶店とかそういう場所だろう。少なくとも、あいだ法律事務所のおフィスでないことは特定できた。別に話された場所を特定したところで、この音声を文字にするのに何の役にもたたないのだけれど、いつ子の野次馬根性は少し満たされる。

この仕事で何が楽しいかといえば、古いのを敢えて承知で譬えに使うなら「家政婦は見た！」的な下品な好奇心を満たしてくれるこんな仕事にたまに当たることだ。離婚だの、ドメスティックバイオレンスだの、やったやらないのドロドロの言い合い。遺産争いだと一億、二億をもらったもらわないなどという景気のいいうさん臭い会話。本当にいろんな人間がいるんだなと感慨も深くなるというものだ。

もちろん、速記会社の大きなお得意さんは地方議会であることは間違いない。よって普段は、道路がどうのここの、最終処分施設をどこそこに作るのは反対だのどうのという、つまらない話を拝聴するという場面が多い。けれど、そういう野次馬的な意味でつまらない仕事は、デジタルで副音声も含めてしっかりとした器材でマイクを使って話された言葉を録ってあるので、聞きやすいという利点がある。そういう仕事は眠気との戦いとなり、目覚ましおやつ、脂肪の蓄積という悪循環に直結する。まさに、前門の虎、後門の才力ミと、そんな雰囲気である。

聴き取り不能な音については、仕様により「・」「や」「」などの記号を、聞こえたとおぼしき音節分だけ打ち込むという習慣がある。多分こんなふうに聞こえた、意味は分らんけど、という場合は力タカナで聞こえた通りに打ち込む。

『女性／・・・・・・・・・・で、・・・・の・・・・カシ・さんは、・・
・酷い誤解・・・・・・・・・・言っただのに、タ・・・・さんは、本当に・・・・な
んです。』

と、こんな状態で納品するのは、幾らなんでもいつ子の美学が許さない。

深呼吸をして平常心を呼び戻し、ヘッドフォンを耳にもどす。ちよつとだけボリウムを落して、恐る恐るフットを踏み込む。

・・・・・・・・さん、大丈夫でしたか？ 熱く・・・・。

何という人が誰としゃべっているのかさえ資料でもらえたら カシタさんなのかカシダさんなのか悩まなくていいし、タケシタさんなのかタケシさんなのか思い煩う必要もない。

「どうしてこんな状態で反訳を引き受けるかね、あの会社の営業は」
いつ子の仕事仲間である白い壁紙にそういう愚痴を聞いてもらって、キーボードに手をおいた瞬間、

ゴガガガゴオガガゴゴゴゴ.....。

としか表現のしようがない非常に聞き慣れた雑音が響きわたった。

「あいだセンセ」、会話隠し録りするなら、高架下の喫茶店は完全

にミスチョイスでしょっつ」

いつ子が壁に向って怒鳴り散らす。この仕事は完全にババだつ。

多分男性、推定五十歳前後、ハゲでデブに違いない、花粉症男の、流行^{はや}つてない興信所（探偵事務所）を秘書もなく（に決まってる）、一人でやりくりしているはずの「あいだセンセイ」とやらが、はっくしょん、と、間拔けたくしゃみで、いつ子に同意するのだった。

4・ベルとだべると、最後は涙

「ねえ、いつ子さん……」

目の前にいる里香^{りか}さんが話しかけてきたので、せつかく途中まで数えていたものが、どこまで数えたか分からなくなった。

チツと舌打ちしたいのを堪^{しの}えて、いつ子はニツコリ微笑んだ。「

ちゃんママじゃあ、私がどこにいるのかかんなくなっちゃうじゃない」とのたもつて、この集まりにファーストネーム呼びかけ運動(？)を展開した張本人だ。こんなことをしていたら、ますます誰と誰が親子か分からなくなる。今でさえ、親と子供の顔はそうそう一致しないというのに。里香さんは、ご苦労さまにも四人も子供がいるくせに、親に緊急に用ができた場合に一時的に子供を預かるボランティアもしているらしい。まったく女の鏡とも言つべきだろうか、よくやるよと呆れるべきか。

今日は、三月のある水曜日の午前中。家にはやりかけて最後まで行き着いてない『あいだ先生とこの例のブツ』を待たせてある。とにかく最後まで入力して、チェッカーを走らせて、聞き直しをして、聴取不能箇所タイマーの秒数とかを書き出して、メール納品のときに校正さんに教えてあげなければならぬ。まったく、本当に、最後までやり遂げるのにリキがある。明日でいいことを今日しない主義のいつ子とはいえ、自分の能力の限界というものも当然認識している。いい加減にペースを上げて片づけないと、納品日の前日は、夜眠れなくなる。

本当はこんなことをしている場合ではないのだけれど、長男が小学校に入学してから長いこと付き合ってきた学校ボランティア、必殺ベルマークちょきちょき活動も今日が最後。次男と長男は丸々三

つ離れているから、九年もこんなことをしてきたことになる。本当に、こういう活動は見てみないふりが十分可能なものだから、人のよさ（端的に言えば、アホさって奴？）では、自分も里香さんに負けてないかもしれない。

「あ、ごめん、数えてた？」

里香がいつ子がちよきぺた（台紙に貼る作業）ではなく、鉛筆を持って点数合計を出しているのに気付いたのか、ばつが悪そうに軽くぺこりと頭を下げる。

「大丈夫、3ばと、3ばと、3ばと2わ、程度の計算だから……」

昔次男が大好きだったネコが11匹出てくる絵本で、シリーズとしてはゲストになるアホウドリが自分も11羽兄弟だと説明する、かの名ゼリフをパクってみた。けれど、里香さんはきょんとした顔になる。さてはアホウドリを知らないな。ガキボラしてる彼女が、あの迷作絵本を知らないとは正直意外だ。

「ごめん、何でもない……気にしないで……」

春なのに寒風吹きすさびそうになった雰囲気を取り繕うとしたとたん、里香が大まじめな顔つきのままで言った。

「それ聞くと、コロッケ食べなくなるよね」

なんだ、やっぱり分かってるじゃない。いつ子は頭を机に打ちつけるところだった。本当に彼女はテンポが世間とずれているのだ。

「里香さん。またロッテ頼むわ。ニッスイの続きは、いつさんが集計終わりそうだから、任せちゃってよ」

世話係をかってでてくれている雅美^{みやび}さんが、仕分け用の食品トレイにこちゃこちゃと乗っている、ゴミというよりホコリサイズでも言つべきマークを持ってくる。

「ええっ」

里香さんが素っ頓狂な悲鳴をあげる。ロッテのベルマークは、はつきりいつて厭味かと突っ込みたくなるぐらいに小さい。直径3ミ

りあるの？という世界。ひたひたと忍び寄る老眼と闘ういつ子のよ
うな年頃の主婦には、はつきりいつてカンに触るサイズなのだ。

「若者よ、老婆をいたわれ」

雅美さんは、北大の歴史に燦然と名を輝かせる某教授のマネのつ
もりらしい口調で言つてのける。

「よっしやあつ、若者に任せなさいっ」

さっきの「ええ」は何なのよという気っ風によさで里香さんは、
どんと攻撃を受け止めた。カッターマットにピンセットを持つてく
るところが、既にこの展開を予想していたのだといえよう。やるぜ、
里香ちゃん。

そう、里香の長男はいつ子のドラ息子より年上なのに、里香自身
はいつ子より随分と若いのだ。まったく……、子育てが終わってか
らの輝けるシルバー生活を考えれば、若い方が勝ち組は決まった様
なものだ。どうせ結婚して主婦に納まるなら、若いママになったとき
やよかったわとつくづく思いつつ、

「よっ、里香さん頼もしいっ。さあ、働け〜若造よっ」

と、気合の入らない拍手をする。

「ねえ、いつ子さん、今仕事どんな？」

雅美さんというのは、例の仕事をいつ子に紹介してくれたユウク
んママのことだ。彼女も人一倍忙しいはずなのに、子供が高学年に
なっても参観日には必ず顔を出して、学級懇談会にまで出てくる時
間はがんばって作り出してくる。

本当に、学校というものに下働きとして関わるメンバーというの
は、場所は変われど顔触れはだいたいいつも同じだ。全然出てこな
い親というのも少なくないのだが、いつ子にしてみれば、幾ら不出
来なドラとはいえども、我が子は我が子だ。その動静が気にならな
いという人種はもはや理解の埒外、想像もつかない。いわゆるび
よんど おぶ まい 理解っちゅうやつだ。

情報交換テーマは、子供が成長するとともに進学だの、加齢と共に親や親戚の介護だのなんなの、愚痴だのへと変化しているが、やっぱり幼児の公園仲間、幼稚園の送り迎え仲間は繋がりが濃い。

「うーん、駄目、もう死ぬね私は。第一、この仕事向いてないといつくづく思うのよっ」

いつ子が言うと雅美さんはケラケラと笑った。

「冗談ばかり……。これ終わったら、いつ子さん引退記念でランチいかない？」

次男が六年生の三月。ということは、本当にベルもこれが最後なのだ。永遠に続けたいと涙して、しみりするようなものではないが、ランチの口実になるなら感謝します。ただ、このベルチョコキの二時間だって週末金曜日までの残り時間を考えたらエラいこっちゃなのだ。ランチといっても、そこはそれ主婦仲間だ。食ったあとに仕事という戦いの現場に向かうOLとは違って、子供が帰ってくる時間までの茶シバキまで突入することは想像に難くない。

「さくら坂の途中にできたイタメシ、ランチセット1000円なんだけど、2000円増しでケーキ付くんだって。あと、オーナーシェフ、シブ系のイケメンらしいわよ」

あいだ先生、ごめんなさい、許して。私にはほかに好きな人が、できてしまったんです。

いつ子は「もう」二日と半分「しか」ないを、速攻で「あと」二日と半分「も」あるに変換して、ガッツポーズをしてみせた。

「1番、香貫いつ子っ、ランチ戦線突撃しまっす」

自分で言っていて、何が一番なんだかと突っ込みたくもなるが、そこはそれ、中年のおばんのお約束というやつだ。

「やった、いつ子隊長、どこまでもついていきまあっす」

雅美さんもノリがいい。

「いつ子隊長、雅美軍曹、里香新兵も一緒によろしゅうござい
ますかあつ」

はいはい、誰も里香さんを拒否れませんよ。いつ子は親指を立て
た。

「聞くまでもなかつ。君は既に人数としてカウントされているの
だよつ」

* * *

「ああつ、このパスタ美味しい。幸せ」

美味しいものを食べると幸せと断言する陽気な雅美さんは、一緒に
食事をしていて文句なく楽しい仲間だ。ブルーで深刻で愚痴ばかり
の連中と、文句を言いつつ食べるのでは、オイシさ半減である。

ここのは平たいパスタで見事なアルデンテ。量を増やすために、
パスタもうどんの固さを目安に茹でてやることにしているいつ子に
は、少々齒ごたえがありすぎるような気もするものの、自家製（本
当か？）とかいう生ハムとオーガニックのブロッコリーをバジル風
味でさくつと絡めた一皿は、自分が作るパスタというシロモノと同
じ名前を付けてはいけないような気がするほどに美味しい。

いつ子の趣味のジャーニーズ系ではないものの、噂に違わぬボクサ
ー風の渋めの風貌をしたオーナーシェフが、いつ子たちの食事の状
況をちらつとみて、コーヒー豆をひきだしたのに、非常に余は満足
じゃモードになれそうな予感がした。どんな贅沢ランチでも、コー
ヒーがまずかったり、ミルクティーに（いつ子は飲まないけれど）
ポーシヨンのフレッシュを付けてくるような店は許せない。ファース
トフードならいざ知らず、レストランを標榜するなら、やっぱり

ミルクティーならピッチャーもちゃんとあったため温かいミルクを添えてくるのが客に対する礼儀つてもんだし、コーヒーならデカンターで煮詰まったものでなく、客の顔を見てから落としたものを入れるべきなのだ。

この店は大当たりだ。これでコーヒーが絶品だったら、幼稚園ママ繋ぎのケイタイメールで、盛大に宣伝を流してやろつと、密かにいつ子は心に決める。実際そうするかどうかは別として……だ。

「本当は仕事なんかしなくても、旦那の給料にパラサイトで生きていたら、文句ないんだけどね」

里香がしみじみと言う。

「えっ、でも、ランチばっかしてたら、太るよ」

「もういいのっ。デブよこいこいっ」

雅美さんが割り込んでくる。

「パパが過労死しちゃったら、いい男捜して再婚するんでしょ。だったら最低限の美しさを」

いいかけたいつ子に、ユウくんママこと雅美さんは盛大に首を振った。

「あれ、もう止めたっ」

「止めたの？」

いい？というように目つきに雅美になる。

「今旦那が突然死しても、今更だれかムコをさがすより、遺族年金と母子家庭手当てで乗り切る方が賢いつてハッケンしたのよ、私は。ついでにどうせ死ぬなら、会社で頼みたいよね。労災もげーっ」と

ユウくんパパは、早朝から深夜まで、相変わらずの年収ベースで搾取されたまま、父親仕事もろくにできないらしい。間抜けに優しい香貫を家事戦力の員数に入れられるいつ子とはまったく違って、話を聞くだけでげっそり気の毒になる。

「あら。雅美さんってば、木脇君狙ってるんじゃないの？
年上の魅力で悩殺するって言ってたよね」

「木脇君とは不倫でっ。そうよ、それぞれ。ねっいつ子さん、知ってる？ 木脇ちゃん、婚約したらしいのよ」

「えーっ」

いつ子の声がおしゃれなイタリアンレストランには不似合いに響いた。私的アイドルの婚約話は、タレントアイドルのそれより、かなりシヨックかもしれない。いつ子はちよつとがっかりする。どうせああいう好青年は、どこからみても美人で切れ者の若い子をゲツトしてるんだ。

ふん、若造カップルよ、今は勝ち誇ってなさいな いつ子は腹の中で、黒いマントをなびかせて夕日を背負った。驕れるものは久しからず。堕ちたな、ジャーニズ木脇。かわいい彼女がナンボのもんよ。女は一度結婚したら、もれなくオバン化するという哀しい現実。哀れなり木脇。ああ、今の君には、それが見えてないに違いない。

愛しの木脇君の頼みで引き受けたあいだ物件に立ち向かう気が、
それでまた一段階、一気にしぼんだ…… そんな気がするいつ子さんであった。

* * *

というわけで、締め日前に残された非常に貴重な時間をベルで半日、ランチで3時間、雅美さん宅茶シバキで2時間まるまるギセイにしたいつ子は、夕方を戦いに費やすことをきっぱりと諦め、洗い

物も少なくて済み、ついでに勝手に食べてもらえるカレー様に御出座願うことに決め、今おでん用特大鍋を引っ張りだして格闘している。

今晚、当然カレー。明日の朝、当然カレー。昼多分カレー。夜、最悪カレーうどん。文句があるやつは、パパと外メシでもするがいつ。

わ、私は……。

いつ子は、大鍋にデカイ杓子でタマネギを炒めつけながら（目は痛めつけられてるけどさ……）悲壮な決意をもって宣言する。そう、誘惑に負ける私がわるい。悪いのは木脇のネコなで声に絆された自身にある。それでも、プロだ。引き受けた以上は、納期だけは死守する。

あいだせんせーの鼻水とくしゃみと……雑音と、自分の不覚のなせる技変換ミスと潔く闘って参ります。

主婦いつ子、兼業音声反訳者。彼女の戦いは、こんなふうに日常にひそむありとあらゆる誘惑と馴れ合いつつ、果てし無く続いていくのだろぅ。少なくとも彼女が、その戦場に立とうとする限り。

今、いつ子の目に涙が滲んでいるのは、敗北の予感に怯^{おび}えているからでも、闘わずして小遣いをゲットできぬ我が身を嘆いているのでもなく、透きとおった艶を帯びてくる前のタマネギたちが、じゃじゃっと文句をいつている所為に違いない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7813/>

闘え！ いつ子さん

2011年10月3日06時14分発行